「日々の理科」（第 1775 号）　2019,-5,19

「肝臓茸／カンゾウタケ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

１学期の今の時期は、校庭や大学構内に、さまざまな動植物が現れるので、子どもたちの質問も多くなる。質問に駆け込んでくるのは、私が担任している６年生よりも、むしろ下学年（１～３年生）のほうが多い。ヘビイチゴだったり、ヒメカツオブシムシの幼虫だったり、ヘビの死骸まで持ち込まれる。

先日も、１年生の女の子が担任に伴われて、６年教室までやってきた。煉瓦の上に、得体のしれない「赤茶色の物体」が載っている。「これ、山にありました。何ですか？」　“山”というのは、小学校の校庭東側にある「斜面」のことだ。そこで遊んでいたら、たまたま木の根元にあった「物体」を蹴飛ばしてしまい、何だろうと恐る恐る持参したという次第だ。

この物体を一発で同定できる教師は少ないだろう。しかし私は一目見て、「カンゾウタケ」というキノコの一種とわかった。

写真は「カンゾウタケ」*Fistulina hepatica* の新鮮な姿である（小石川植物園）。人間（動物）の臓器を名称にしたキノコは、ノウタケ（脳茸）と、このカンゾウタケ（肝臓茸）だけだろう。

子実体（キノコ本体）は柔らかく、カッターナイフで容易に切断できる。切断すると、血液よろしく赤い液が出てくる。日本ではほとんど馴染みがないキノコだが、欧米では、「牛の舌」とか「ステーキキノコ」と呼ばれて、好んで食用にされるという。

キノコは切断すると、酸化されて肉（子実体内部）の色が変化するものが多い。カンゾウタケもその変化が著しく、しばらくすると、内部が真っ赤に変化する。カンゾウタケとはよく名づけたものだが、これはもう説明がなければ「霜降り肉」と間違えそうである。